

The National Railway Museum, The Museum of Science & Industry in Manchester, そして The British Library
*The National Railway Museum, The Museum of Science & Industry in Manchester,
 & The British Library*

吉田 英生 (京都大学)
Hideo YOSHIDA (Kyoto University)
 e-mail: yoshida@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

ヒストリーQ “蒸気機関車” のタイミングに合わせて、鉄道王国である英国の博物館 The National Railway Museum (in York) と The Museum of Science & Industry in Manchester とを本年9月に取材した。また、その機会に世界最大の図書館の一つ The British Library (in London) についても利用したので、これらを合わせて紹介させていただく(3都市の位置関係は図1参照)。

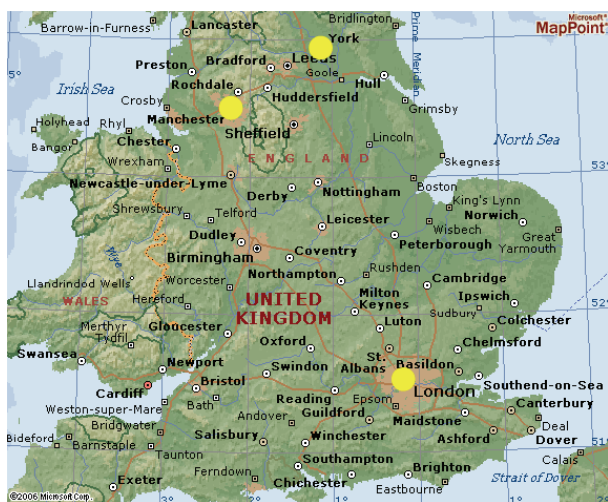


図1 London と Manchester と York (<http://encarta.msn.com/encnet/features/mapcenter/map.aspx> より)

2. The National Railway Museum

York はイングランド北部にある 2000 年の古都 (<http://www.york.gov.uk/>, <http://www.visit-york.org/>) であり、英国最大のゴシック大聖堂 York Minster (<http://www.yorkminster.org/>) やローマ時代に作られた city wall も残る、Ouse 川沿いの大変美しい町である。

その西端に位置する York 駅のさらに西側 (裏口) に世界最大の鉄道博物館 The National Railway Museum (<http://www.nrm.org.uk/home/home.asp>) がある (図2, 図3)。大きく分けて、入口の右側に

は Great Hall とさらに奥に The Works, 左側には Station Hall, があり、英国の蒸気機関車を中心に多数の鉄道車両が展示されている。Great Hall の中にはターンテーブルもあるから、以前の操車場跡であろう。Great Hall のいちばん奥には鉄道の父 George Stephenson (1781-1848) の像がある (図4)。



図2 The National Railway Museum



図3 The National Railway Museum の入口 (左側) と Great Hall (右側)



図4 George Stephenson の像



図5 Rocket号 (レプリカ)



図6 Mallard号と Shinkansen



図7 人気者の Shinkansen



図8 Shinkansen (室内でのビデオ放映)

Great Hall に展示された数ある車両の中でも注目すべきは以下の三つであろう (図 5-8).

- ・ Rocket号 : Robert Stephenson (1803-1859) により設計・製作された。3章と4章に後述。
- ・ Mallard号 : 1938年に蒸気機関車最速記録 (であると言われている) 時速 126 マイルを達成した。The Flying Scotsman の設計者でもある Sir Nigel Gresley (1876-1941) が流線型スタイルを採用した。
- ・ Shinkansen : 島 秀雄 (1901-1998) が開発の中心となったことは言うまでもない。同博物館の Official Guidebook [1] には以下のような記述がある。 “It's hard to believe that the Bullet Train - or Shinkansen train to give it the correct Japanese name - was built in 1964, just four years after we had built the last British main line *steam* locomotive. But it's true.” 筆者はさらに、“新幹線は日本の多くの部分が焦土と化した敗戦からわずか 19 年後に完成したことを信じられるか” と付け加えたいと思う。

3. The Museum of Science & Industry in Manchester

George Stephensonが1825年9月27日にStockton

- Darlington 間に導入した世界初の鉄道では、石炭輸送のみが Locomotion 号で行われ、その他にケーブルによる牽引や馬なども併用されていた。

一方、産業革命で綿工業の中心となった Manchester では西方の Liverpool 港で輸入・陸揚げされた綿の輸送が重要であり、また両都市間での商人の移動も盛んであった。そこで、Manchester - Liverpool 間で旅客を含めて全て蒸気機関車で営業運転することが計画された。このための機関車コンテストが 1929 年 10 月 6 日から開催された(後述の図 12 参照)。自重の 3 倍の荷を引いて距離 70 マイル (片道 $1\frac{3}{4}$ マイルのトラックを 20 往復) という条件で、優勝したのは George の息子の Robert が設計した Rocket 号であった [1, 3] (<http://www.sciencemuseum.org.uk/on-line/treasure/objects/1862-5.asp>)。そして翌 1830 年 9 月 15 日から Manchester - Liverpool 間の営業運転が始まった。

The Museum of Science & Industry in Manchester (<http://www.msim.org.uk/index.asp?menuid=723>) は、その開業当時の建物を利用したものである (図 9, 図 10)。5 つの展示館には以下のような番号がつけられている。①Main Building ②1830s Warehouse ③Station Building ④Power Hall ⑤Air & Space Hall。これら中で、③には Rocket 号の模型などが展示されており、④には、蒸気機関や蒸気機関車などの実物が集められている。図 12 は Thomas Newcomen の蒸気機関のレプリカ。図 13 の Novelty 号は Rocket 号には負けたが美しい外観で人気があったとのことである。また、カットされた蒸気機関車の前では子供を相手に説明をするおじさんがいて、なごやかな雰囲気満ちていた (図 14)。



図 9 The Museum of Science & Industry in Manchester の入口 (①Main Building)



図 10 ③Station Building にある説明

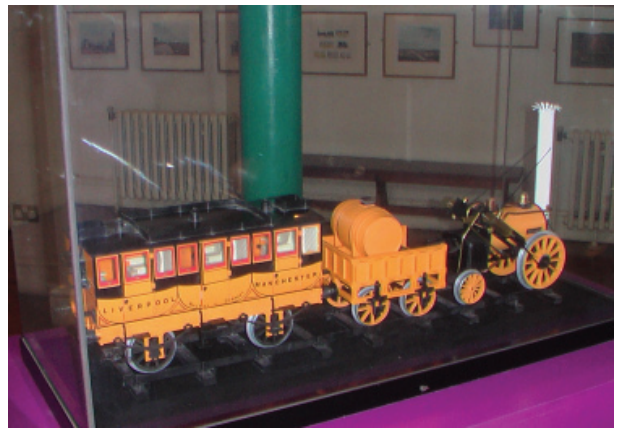


図 11 Rocket 号の模型 (③Station Building)



図 12 Newcomen の蒸気機関 (④Power Hall)

http://www.msim.org.uk/uploadedDocs/Document_Depository_01/Replica%20Newcomen%20Atmospheric%20Engine.pdf より

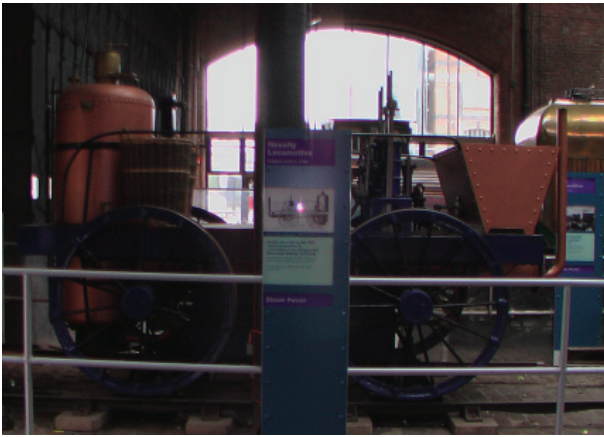


図 13 Novelty 号のレプリカ(④Power Hall)



図 14 蒸気機関車のカットモデルの前で
子供に解説する機関士おじさん (④Power Hall)



図 15 ②と③に挟まれた線路を走る Planet 号

そのほか、午後には図 15 のように実際の蒸気機関車を全長 200m 程度の線路で往復運転していた。総じてこの博物館の HP は良心的で、例えば <http://www.msim.org.uk/Galleries.asp?menuid=876> には View 360 Tour があって雰囲気把握できる。<http://www.msim.org.uk/customPages/FramesContentFrame.asp?menuid=1000> の情報も有用である。

4. The British Library

人類の貴重な記録に触れることができるのは博物館だけではない。万巻の書を所蔵する図書館こそ真っ先に挙げるべきであろう。London の Euston 駅と King's Cross 駅の間にある The British Library (<http://www.bl.uk/>) は、世界屈指の情報源である(図 16, 図 17)。入口にある巨大な像は、英国が誇る Newton がコンパスで思索している姿である。図 16 だけでは、大きさがとらえにくいかもしれないが、図 17 の人の背丈も合わせて見ていただくと、この建物の巨大さが理解いただけるかと思う。

The British Library のリーフレットには、

OUR MISSION

Helping people advancing knowledge to enrich lives.

と書かれている。The British Library では、この言葉どおりに万人に機会を与えるべく、最大限の努力をしていることが伝わってくる。開館日は特別な休日を除いて毎日、ただし以下に述べる Reading Room は日曜は閉館となっている。



図 16 The British Library 全景



図 17 玄関で 9:30 の開館を待つ人々

現地で残念に思うことのないよう少し詳細に記述しよう。Reading Room を利用するには、まず登録が必要である (<http://www.bl.uk/services/reading/admissions.html>)。このためには住所と署名とを証明する書類が不可欠であるが、登録デスクには日本人スタッフがいたので日本語の書類で十分である。今回の筆者の登録では滞在日数を考慮して 8 日間有効にしてくれたが、もし教育機関の在籍証明書も持ち合わせていたら 3 年間有効とできるそうである。登録を終えたら、登録証と鉛筆 (パソコン・貴重品も可) だけを透明の袋に入れて、他はクロークに預けなければ入室できない。さらに、貴重な書物を汚さないよう、“Clean dry hands” という注意書きが目立つように表示されている。

Reading Room のワークステーションで検索して本を請求すると、館内に保管している本の場合は平均 70 分程度 (ただし 16 時以降の請求は翌日渡し)、館外に保管している場合でも最大 48 時間

以内に届けられる。一方、Reading Room のワークステーションからなら、電子情報として画面上で閲覧し簡単にコピーできる (1 枚当たり p20, 約 45 円 : 5 枚単位で £1, 約 225 円のコピーカードを購入) 情報も少なくない。今回、筆者がその恩恵に浴したのは、*The Times* のアーカイブである。

まず The Humanities Reading Rooms の HP

<http://www.bl.uk/services/reading/humanities-rr.html> に入って、さらに

<http://www.bl.uk/collections/wider/elecsubaz5.html#letter>

まで進むと

Times Digital Archive

A digital edition of *The Times*, using keyword searching and hit-term highlighting to retrieve full facsimile images of either a specific article or a complete page. The period covered is 1785-1985.

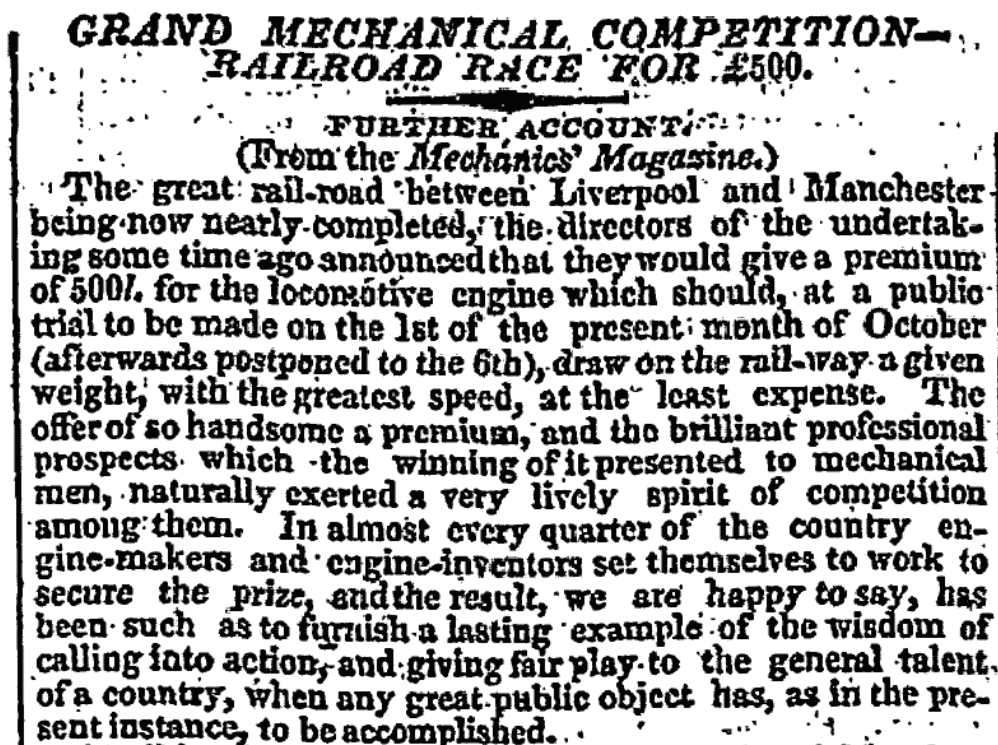


図 18

The Times, Oct 09, 1829; pg. 3; Issue 14040; col D

Grand Mechanical Competition railroad Race For £500. Further Account.

Category: News

Full Text: Copyright 1829, The Times

に辿り着く。このアーカイブはスキャンコピーされたものであるが、文章自体は電子情報化されているので、検索機能でどのような項目でも引き出すことができる。今回、1829年のRobert StephensonのRocket号を検索したら、競争に勝って£500を手にした記事(図18は冒頭部分のみ)が一瞬で出てきたのには感激した。

最後に蛇足ではあるが、地下中1階のクロークの突き当たりにある絵を紹介しよう(図19)。何気ない書棚の絵なのだが、その前を通り過ぎるときに図が変化する。最初は目まいでもしたのかと思って引き返してみたが、やはり変化する。かといって電光掲示板上の図でもなさそう。図の前にしばらく立って観察したらようやく謎がとけた。このような絵をこんなところに飾るなんて、やはり英国らしいウイットかなと感心した。

5. むすび

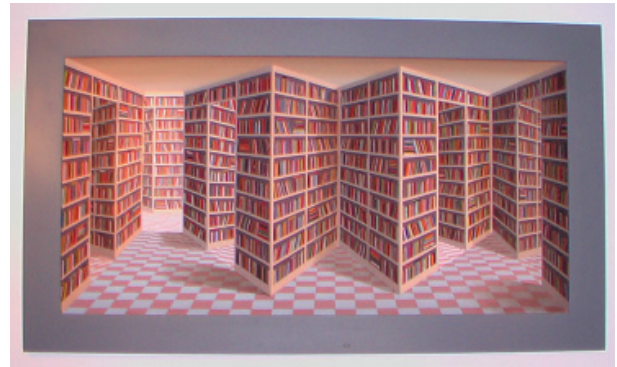
前号のIron Bridge Gorge Museumsに引き続いて英国を再訪する機会にめぐまれ、産業革命に関する一連の博物館取材することができたことに感謝したい。英国に行くたびに感じるのは、今日の文明の基礎を築き上げた底力、伝統を重んじて豊かな人生を実現しようとする強い意志、同時に新たな世界を切り拓く旺盛な独創精神である。わが国も、最後の点では負けてはいないと思うが、中世から続いているような英国の美しい街並みとは正反対のわが国の醜悪な街並み(電柱、電線、看板、コンクリート)[6]などを思うにつけ、過去から現在そして未来に文明を引き継いでいく上で、われわれが学ぶ点は多いと思う。もちろん英国の欠点も多々指摘されてはいるが、他人の欠点に注目して益することはめったにない。蒸気機関および鉄道という動機からではあったが、英国の博物館めぐりをしている間に、それ以外のさまざまなことを考えさせられた。

参考文献

(全般的に参考にさせていただいた文献については、本文中では特に箇所を明記していない。)

- [1] National Railway Museum, The World's Largest Railway Museum Official Guidebook, ISBN-13 978 1 900747 62 2, ISBN-10 1 900747 62 6.
 [2] National Railway Museum, The Story of the Train, ISBN 1 872826 1 1 3, (1999).

- [3] C.C. ドーマン(前田清志訳), スティーブソンと蒸気機関車, 玉川大学出版部(1992).
 [4] The Museum of Science & Industry in Manchester Museum Highlights.
 [5] 森本哲郎, 文明の主役—エネルギーと人間の物語—, 87, 新潮社(2000).
 [6] アレックス・カー, 美しき日本の残像, 朝日文庫(2000).



(a) 正面から



(b) 左から



(c) 右から

図19 PARADOXYMORON by Patrick Hughes

追記 1

The British LibraryのReading Roomでは無線LANが(例えば1日£6で)使用できるので便利ではあるが、備え付けのワークステーションのように館内資料の閲覧はできず、館外でインターネットを利用するのと変わらない。

追記 2

前号のIronbridge Gorge Museumsの記事でBritrail England Passが4日間有効で28,500円と記したのは1等料金であった。2等なら4日間有効で18,900円、8日間有効でも27,100円(以上2006年9月現在)と極めて経済的である。このチケットでHeathrow空港からPaddington駅までを結ぶHeathrow Express(<http://www.heathrowexpress.com/>)にも乗車できる。